

隠れた美術館——丸沼芸術の森——

鈴木邦夫

第1節 丸沼芸術の森の形成

埼玉県には、とてもユニークな美術館がいくつもある。たとえば蕨市かわなべきょうさいに河鍋曉斎記念美術館があり、朝霞市に丸沼芸術の森がある。両施設に共通する点は、第1に展示スペースがごちんまりしていることである。展示替え期間を除くと年間をとおして開館しているものの、河鍋曉斎記念美術館の展示スペースは狭小であり、またほとんど開室していない丸沼芸術の森の展示室はもっと狭く、しかも作りはプレハブ小屋である。後に説明するように、丸沼芸術の森は、展示室の貧弱さから想像できない大量の美術品を現在も集積し続けている隠れた美術館である。共通点の第2は、このような展示スペースにもかかわらず、前者では「掛け値なし、絵筆の天才」⁽¹⁾の曉斎(1831-1889年)の曾孫が家に残ったもの(いいかえれば売り物にならなかったもの⁽²⁾)を所蔵しているため、完成品ではなく下絵・画稿類が多く、後者ではアーティストの制作に参考となるものを意図的に収集しているため、素描が多い。ともに作品の制作過程を知ることができる貴重なコレクションとなっており、ここに両者に共通するユニークさがある。

つぎに丸沼芸術の森について詳しくみよう。あらかじめ断って置くと、はじめに丸沼芸術の森を美術館とした。しかしこの施設は美術館の範疇だけに収まらない組織であり、美術品を作り出すための場をアーティストに提供するという特徴を備えている。

丸沼芸術の森が生まれる経緯はつぎのとおりである。現在、「主宰」としてこの組織を運営して

いるのが須崎勝茂氏すきまつしげである(以下、人物について敬称を省略)。若い時から趣味を持って父の須崎すきまつしげ三四に諭された勝茂は、絵は無理だが陶芸なら「ごまかすことができる」と思い、東京芸術大学の大学院を修了した人を紹介してもらって、自分の土地(所有者は勝茂⁽³⁾)に窯を設置して陶芸を始めた。この陶芸の窯設置が契機となって、のちに陶芸の愛好組織(工房アサカ倶楽部⁽⁴⁾)ができ、現在の丸沼陶芸倶楽部⁽⁵⁾へと発展する。

ところが紹介してもらった人が窯焚きに失敗したために、その人を首にしたという。すると2、3年後に再び現れて、制作する場がないので場所を貸してほしいといったという。勝茂が同意すると、この人は5人くらいでアトリエを建てた。その後、だんだんと友達を呼んできたためアトリエの数が増えていく。1985年に呼んできたうちのひとりが彫刻の二藤規朗のようである。丸沼芸術の森の設立年とされている1985年と、最初のアトリエ設置は同じ年のようである。2012年11月現在では、14人のアーティストがアトリエを構えて制作活動をおこなっている⁽⁶⁾。勝茂は後年、つぎのように記している⁽⁷⁾。

私が主宰しております丸沼芸術の森は、昭和60年に若手芸術家への支援のためアトリエを提供する活動によりスタートしました。趣味で陶芸を始めたことで、美術大学を卒業したばかりの多くの若い作家たちが直面する“制作場所確保が困難”という問題を知ったのがきっかけです。

1985年から現在までにこの施設で制作活動を

おこなっていた（現在も活動中を含む）アーティストのうち判明する人は第1-1表のとおりである。この表からわかることは、第1に、最初にアトリエを構えたのが東京芸術大学卒業生であり、その人が友達を連れてきたため、東京芸術大学出身者が多い（9名）。第2に後述するように勝茂が彫刻家の佐藤忠良の作品を購入し、佐藤のアトリエを訪問するなど佐藤の面識をえ、しかも佐藤が1966年東京造形大学設立以来の教授であった関係からか、同大学出身者が3名いる。このほか多摩美術大学3名、武蔵野美術大学3名、日本大学1名、京都市立芸術大学1名がおり、東京芸術大学卒業・修了者に偏っているわけではない。第2に丸沼芸術の森開設の1985年から現在までの二

藤規朗（28年くらい）、1995年頃から2010年までの末広裕一（15年くらい）、1998年から現在までの儀保克幸（15年くらい）など、長期にわたって丸沼芸術の森で制作活動をおこなっているアーティストがいる。アトリエを設ける期限は取り決めているようである。しかし期限の更新は容易なようである。第3に、更新が容易なためか、現在アトリエを構えている人を見ると、60歳くらいから20代半ばくらいにまで年齢が分布している。この幅広い分布は、最初、若手であっても、長くアトリエを構えている人がいるためであろう。

アトリエを構えていたアーティストのなかに現在、海外で高い評価をえている村上隆が含まれている。現代日本のアーティストで、オークション

第1-1表 丸沼芸術の森のアーティスト

氏名	生年, 学歴, ジャンル
(現) 渡辺 一宏	1953年生, 1985年東京芸術大学大学院修了, 彫刻
(現) 榎本 洋二	1955年生, 1983年東京芸術大学大学院修了, 陶芸
(現) 二藤 規朗	1956年生, 1983年東京芸術大学大学院修了, 1985年から丸沼芸術の森で制作活動開始, 彫刻
村上 隆	1962年生, 1993年東京芸術大学博士〈美術〉取得, 現代美術
(現) 山本 靖久	1963年生, 1989年武蔵野美術大学大学院修了, 洋画
(現) 儀保 克幸	1967年生, 1990年東京造形大学卒業, 1998年から丸沼芸術の森で制作活動, 彫刻
檀浦 誠二	1967年生, 1995年東京芸術大学大学院修了, 陶芸
(現) 大橋 博	1967年生, 1999年東京芸術大学大学院修了, 彫刻
栗原 慶	1968年生, 1994年東京芸術大学大学院修了, 陶芸
(現) 川部 倫子	1971年生, 1993年東京造形大学卒業, ガラス
(現) 長尾 望	1979年生, 2003年多摩美術大学卒業, 現代美術
(現) 入江明日香	1980年生, 2004年多摩美術大学大学院修了, 銅板画
(現) 青木 美歌	1981年生, 2006年武蔵野美術大学卒業, ガラス
* 河 明求	1983年生, 2013年京都市立芸術大学大学院修了
* 堀 太一	1985年生, 2010年武蔵野美術大学卒業, 陶芸
(現) 進川 桜子	1986年生, 2010年日本大学大学院修了, 同年から丸沼芸術の森で制作開始, 絵画
(現) 中村 亜生	1988年生, 2011年東京芸術大学卒業, 絵画
(現) 丸山 栄子	2012年東京造形大学大学院修了, 彫刻
末広 裕一	東京芸術大学大学院修了, 絵画 1995年頃から2010年まで丸沼芸術の森で創作活動
鈴木 伸	多摩美術大学卒業, 1995年頃から2010年まで丸沼芸術の森で制作, テンペラ
鈴木 博貴	平面
* 藤田 金治	書

(出所) 丸沼芸術の森「芸術家紹介」(<http://marunuma-artpark.co.jp/artist/index.html>, 2013年11月9日最終確認), 茨城県近代美術館「朝霞市 丸沼芸術の森所蔵 アンドリュー・ワイエス水彩・素描展 同時開催 丸沼芸術の森 アトリエの作家たち」(<http://www.modernart.museum.ibk.ed.jp/exhibition/kikaku/index.html>, 2013年5月9日最終確認) など。

(注) (現)と付けた人は、2013年3月現在、丸沼芸術の森で制作活動をおこなっているアーティスト13名である。「大学院修了」と表記したものはいずれも修士課程の修了である。

*を付した河・堀・藤田は2013年4月以降に丸沼芸術の森で制作活動を始めたようである。

の落札額が1品で100万米ドル（ほぼ1億円）を超えたのは草間彌生、村上隆、奈良美智、杉本博司である。とくに村上の作品では、2008年5月14日ニューヨークのサザビーズのオークションにおいて落札されたフィギュア作品“My Lonesome Cowboy”の1,516万米ドル（約16億円）が飛び抜けて高く、これが4人のなかの最高額である。

村上隆と丸沼芸術の森との関わりはつぎのとおりである。村上は1993年3月25日に東京芸術大学から博士号を授与された。村上が博士号を取得する前に、須崎勝茂がある人の紹介で芸大に「面白いのがいるから一緒にいこう」とさそわれていったところ、村上から「須崎さん、これを買ってください」といわれて、37点をそっくり買ったという。買って2か月後、村上がやってきて、博士課程を終えたら（単位取得退学のことか）、もう学生ではなくなったので大学を追い出されたといった。勝茂がアトリエを貸してくれということかと聞くと、そうだということで貸したのである。ギャラリストの小山登美夫が1991年の修了制作展で後述の「ポリリズム」を見て衝撃をうけたと述べていることから⁽⁸⁾、村上が丸沼芸術の森にアトリエを構えたのは1991年のようである。

ところで、村上の博士論文の構成は、「論文」部分が「美術における『意味の無意味の意味』をめぐる：アウラの捏造を考察する」、「作品」部分が「論文に基づく作品：『カリエス』『ポリリズム』『R.P.』『日本画カラース』他」となっていた⁽⁹⁾。現在、「ポリリズム」（プラモデルメーカー田宮模型のフィギュアを用いた作品、1991年）は高橋コレクション⁽¹⁰⁾、「R.P.」（ランドセル・プロジェクト。ワシントン条約で国際取引が禁じられているクロコダイルやカバなどの皮革でつくった8つの様々な色のランドセル、1991年、のちに政治性を孕んだコンセプチュアル・アートと評価される）は豊田市美術館に所蔵されており、ともに現在の村上の作風に属するものである。しかし勝茂が購入したものはこれらとは全くことなり、抽象画が多いという。勝茂はその後も、村上が売れない時代にデッサンなどを購入し、村上による

と勝茂が200点近く購入したはずという⁽¹¹⁾。

村上が丸沼芸術の森に制作活動の拠点をかまえていたのは2008年12月までの、およそ18年間である⁽¹²⁾。村上は、1993年オリジナルキャラクター「DOB君」（のちに村上のアイコンとなる）の発表、1995年フィギュア・プロジェクトの開始（→1996年女性フィギュアのMiss ko²とHiropon、1998年男性フィギュアMy Lonesome Cowboy）、1999年ニューヨークでの個展開催（開催前日までに作品は完売という）、2000年スーパーフラット宣言発表（→2001年「スーパーフラット展」をロサンゼルス現代美術館ほかで米国各地で開催）など、丸沼芸術の森を拠点として精力的に創作活動に取り組んだ⁽¹³⁾。

1996年にはプレハブ内にヒロポンファクトリー（個人企業）を設立して、自分自身だけでなく若手芸術家のマネジメント事業なども開始し、さらにこの組織の事業を引き継いで2001年4月20日に有限会社カイカイキキ（資本金300万円、役員は取締役村上隆のみ）を設立した。同社の本店は、朝霞市上内間木493番地、つまり丸沼芸術の森の地であった。同社の最初に定めた事業目的は、「1. 国内外の展覧会・イベント・現代美術の講座の企画・制作」、「2. 美術作品の輸出入」などであり、さらに2003年3月12日には、上記2の部分に「美術作品の企画、制作及び販売並びに輸出入」に変更するとともに、「著作権、出版権、翻訳権等の管理及び売買」という事業目的を新たに追加した⁽¹⁴⁾。これ以降、この会社によって村上は、自分自身及びカイカイキキに所属するアーティストの作品の著作権など（「コピーライト」）を厳しく管理した。たとえば村上作品の写真を所蔵者（美術館を含む）がインターネットに掲載したり、展覧会図録に掲載したり、あるいは新聞社が写真を載せて報道したり、オークション会社が目録やインターネットに写真を掲載する際には、カイカイキキの許可を必要とする（したがって掲載料を支払うよう求める）という、日本では画期的な試みを開始した。

村上の制作活動が飛躍的に拡大したため、丸沼芸術の森のスペース（2006年頃には、アトリエ3

棟にまで拡大⁽¹⁵⁾)では手狭となり、2008年12月1日に本店を東京都港区元麻布2丁目3番地30号元麻布クレストビル2階に移転するとともに、同年12月18日支店を埼玉県入間郡三芳町竹間沢東2番地6に設置して、アトリエを丸沼芸術の森から三芳町に移転した⁽¹⁶⁾（「三芳スタジオ」と呼ぶ。借り入れた倉庫をアトリエとした⁽¹⁷⁾）。

話を丸沼芸術の森に戻そう。陶芸用の窯の設置とアーティストへのアトリエの提供から始まったこの組織に新たな性格（まとまりのある美術品の集積と対外的な公開・展示という美術館としての公開）が加わることになったのは1996年11月という。この年、勝茂にアンドリュー・ワイエス（Andrew Wyeth）の作品238点を購入しないかという話が持ち込まれた。1993年に銀座の画廊でみてその時にも購入を打診されたものであった。丸沼芸術の森のアーティストに集まってもらって相談すると、「勉強になるから買ってくれ」といわれたので、丸沼芸術の森の画家と彫刻家をともなってニューヨークの倉庫に作品を見に行き購入契約をして、10月にメイン州にあるオルソン・ハウス（オルソン家姉弟との交流はワイエスの主要なテーマ）を訪ねたら偶然ワイエスも来たので彼に合うことができたという。購入価格は億単位と述べている⁽¹⁸⁾。

勝茂はこれ以前から美術品の購入を進め、1994年に展示室を建てて美術品の展示を始めていた。しかし、ワイエス作品の購入以前は、一つのテーマで公立の美術館において展示できるようなまとまりはなかった。ワイエス作品購入によってはじめてこのようなまとまりのある作品群が丸沼芸術の森の加わることとなった。丸沼芸術の森はワイエス展を、2000年10月から平塚市美術館を振り出しに、岐阜県美術館など3館、2004年4月から4館、2006年10月1館、さらに2007年1月から、オハイオ州のシンシナティ美術館など米国の3館で開催した⁽¹⁹⁾。

ついで勝茂はベン・シャーン（Ben Shahn）の作品約200点を購入し、2006年2月から埼玉近代美術館でベン・シャーン展を開催している。その後も、2008年頃にシャーンの作品を追加購

入し、2012年11月には埼玉近代美術館でベン・シャーン展を開催し、約300点を展示している。また2012年10月には朝霞市博物館で佐藤忠良展を開催し、佐藤の他に、佐藤作品のモデルでもあった笹戸千津子や、柳原義達、舟越保武の作品も展示した。また、丸沼芸術の森でも展示室で展示を19回開催しており、2013年12月には第20回を開催予定である⁽²⁰⁾。

丸沼芸術の森に収蔵された作品は、2005年6月時点ですでに1800点に達しており、それを勝茂は自宅の収蔵庫に保管しているという。丸沼芸術の森のコレクションは第1-2表に示したように、様々なジャンル、作家の作品で構成されている。モネ、ドラクロワ、コロアの作品については後述するため、それ以外の作者の作品をみると、前述の100万ドル作家のひとり、杉本博司の劇場シリーズ全作品（50点近く）が所蔵されている。この作品について勝茂は、杉本とギャラリー小柳（日本での杉本契約ギャラリー）の小柳敦子（杉本の妻）が丸沼芸術の森を訪問して、勝茂といろいろ話している間に購入することになったと述べている⁽²¹⁾。ギャラリー小柳では、杉本の作品（写真）は、1作品の値段が「2百から3百万、高いのだと4百から7百万ぐらい」⁽²²⁾という。劇場シリーズは、杉本の代表的な作品である。仮に1作品400万円と評価すると、50点近くなら2億円弱になる⁽²³⁾。

しかし、このような高価な完成品を収集していることが丸沼芸術の森コレクションの特徴なのではない。勝茂はつぎのように述べている⁽²⁴⁾。

そして彼ら芸術家にとって必要なのは、本物の芸術を直にみる・触れる機会を多く持つということです。“作家たちの勉強になるならば集めよう”というのが、美術作品の収集を始めた動機でした。

作家たちの勉強になり、制作の過程がわかる素描類を多数収集しているところにこそ、丸沼芸術の森コレクションの特徴を見いだすことができる。これまでの話をまとめてみると、丸沼芸術の森

第1-2表 丸沼芸術の森コレクションの内容

作家	所蔵品	ジャンルなど
アンドリュウ・ワイエス ベン・シャーン	238点所蔵 埼玉県立近代美術館「ベンシャーン展」2012.11.17-2013.1.14開催に292点出品	水彩画, 素描 素描, テンペラ, グワッシュ, 水彩画, ポスター
村上 隆	1990年前後に制作された50点以上所蔵, 「colors」(紙本着色), 「ROSE」(金箔・漆・木・ステンレス) など	現代美術
杉本博司 佐藤忠良	劇場シリーズの全作品(50点近く)所蔵 朝霞市博物館「佐藤忠良展」2012.10.13-11.25に43点出品, 100点以上を所蔵	写真 ブロンズ, 水彩画, 素描
歌川広重 クロード・モネ ウジェーヌ・ドラクロワ	東海道五十三次シリーズの全55作品所蔵 「ルエルの眺め」(登録美術品, 登録番号9) 「聖ステパノの遺骸を抱え起こす弟子たち」(登録美術品, 登録番号10)	浮世絵 油彩画 油彩画
カミーユ・コロー ギュスターヴ・モロー カミーユ・クローデル モーリス・ドニ モーリス・ド・ヴラマンク ジョルジュ・ルオー ジャン・フランソワ・ミレー アントワーヌ・ブルーデル モイズ・キスリング	「ヴィル・ダヴレーの湖畔の朝霧」 「ダビデ」 「飛び去った神」 「果実を運ぶ女たち」, 「聖杯」 「青い花」 「曲芸師」 「草刈りをする人々」 「アポロンの頭」, 「授乳する母親」 「若い女性のポートレート」, 『アムステルダム』, 『花束』, 「港風景」, 「イリヤヌの眼」	油彩画 エッチング ブロンズ 素描 油彩画 油彩画 素描 ブロンズ 油彩画, 素描
ジュール・パスキン アルベール・マルケ エドガー・ドガ カミーユ・ピサロ ウジェーヌ・ブーダン アイスティド・マイヨール 加藤孝造 鈴木三成 安井曾太郎 川合玉堂	「バベットとレベッカ」 「アルジェの港」 「踊り子」 「草刈りする女性」 「ノルマンディーの風景」 「スカーフをした女性」 約200点所蔵 60点以上所蔵 素描30点余り所蔵 写生30点以上所蔵	素描 油彩画 素描 素描 油彩画 ブロンズ 陶器 磁器 素描 素描

(出所) 丸沼芸術の森のホームページ, 各種展覧会図録など。

(注) 判明するだけでも, 掲出した作家の作品の他に, 絵画では藤田嗣治, 奥村土牛, 梅原龍三郎, 小杉小二郎, 前田青邨, 伊藤深水, 下保昭, 版画の長谷川潔, 陶芸では板谷波山, 藤本能道, 荒川豊蔵, 楽吉左衛門(十五代), 今泉今右衛門(十三代), 酒井田柿右衛門(十四代)など多数, 彫刻では高村光雲, 山崎朝雲。平櫛田中, 柳原義達, 舟越保武, 笹戸千津子, 現代美術では河口瀧夫, ガラスではドーム, ガレー, 藤田喬平の作品を所蔵している。

は, 第一にアーティストを支援するためにアトリエを提供している施設, 第2にアーティストの制作に有益な, 様々な分野の素描類・完成品を所蔵し, 施設内の展示室と外部の美術館で展示している施設, 第3に陶芸愛好家のために陶芸教室(丸沼陶芸倶楽部。現在, 100名規模)を運営している施設, 第4に朝霞市民吹奏楽団に事務所を提供

している施設⁽²⁵⁾である。

第2節 須崎家関係土地の所有者の変遷とコレクションの資金源泉

1. 須崎六郎家の土地

須崎勝茂の祖先をさかのぼると, 1900年頃の

第2-1表 須崎六郎所有土地の処分

	田	畑	原野	山林	墳墓地	合計	宅地	合計賃貸価格
1945年8月15日現在	3町6反1畝22歩	1町7反8畝	3反6畝21歩	3町2反8畝14歩	1畝09歩	9町0反5畝29歩	1,409坪06	1,208円03銭
農地改革による強制買収	1町6反9畝05歩	—	1畝27歩	—	—	1町7反1畝02歩	—	401円83銭
須崎はな(旧地目区分)	1反8畝	8反6畝04歩		1町1反1畝18歩			1,319坪06	
鈴木三四(旧地目区分)	1町6反1畝22歩	2反2畝21歩		16歩				
須崎勝茂(旧地目区分)	1反2畝18歩	4反9畝05歩		7反0畝18歩				
須崎重治(旧地目区分)		2反		1町4反5畝22歩				
墳墓地					1畝09歩	1畝09歩		—
須崎はなへの贈与				2町1反5畝22歩		2町1反5畝22歩	1,409坪06	287円55銭
須崎三四への贈与	1町6反1畝22歩	2反2畝21歩		16歩		1町8反4畝29歩		397円30銭
須崎勝茂への贈与			3反4畝24歩	1町3反2畝11歩		1町6反7畝05歩		69円27銭
須崎重治への贈与				1町6反5畝22歩		1町6反5畝22歩		52円08銭

(出所) 埼玉県北足立郡朝霞町大字上内間の「土地台帳」(埼玉地方務局志木出張所所蔵)。

(注) 旧地目区分と表記したものは、のちに須崎はならへ寄贈される土地の1945年8月15日現在の地目である。

当主が重左衛門，ついで儀三郎，六郎と続く。1945年敗戦時点の当主は六郎であり，六郎の時に農地改革に遭遇した。六郎は，朝霞町大字上内間木789番地に居住していた。表2-1に示したように，敗戦時点に六郎が上内間木に所有していた土地は田3町6反1畝22歩，畑1町7反8畝，原野3反6畝21歩，山林3町2反8畝14歩，墳墓地1畝09歩，宅地1,409坪06である⁽²⁶⁾。須崎六郎家は，居村で耕作をし，農地の一部を小作人に貸し付ける在村耕作地主という範疇に属する家であろう。

1946年から始まる農地改革によって須崎六郎家では，田1町6反9畝05歩，原野1畝27歩，合計1町7反1畝02歩が農林省により強制的に買収された。

農地改革においては，在村耕作地主の場合，田・畑の3町歩(平均)が所有の上限とされ，原則として原野や山林は強制買収の対象外とされた。ただし，耕作可能と判断され部分は原野・山林の強制買収の対象となった。六郎家の場合には，原野

の一部が耕作可能と判断されて強制買収されたのである⁽²⁷⁾。

ところが，田・畑をみると，強制買収後に須崎六郎家には，田1町9反2畝10歩，畑1町7反8畝，合計3町7反0畝10歩が残っている。この数値は，農地改革で定められた田・畑の上限3町歩(平均)を約7反歩も上回っている。なぜ，上限を大幅に上回る所有が認められたのであろうか。

荒川が北側に流れている上内間木地区は1938年夏の台風による水害，1941年6月の台風による水害など，しばしば水害に見舞われていた⁽²⁸⁾。六郎家の土地は，とくに1938年夏の台風によって大きな被害を受けたようである。この災いが後に幸いすることになる。

六郎家は，1940年11月5日に田3反0畝18歩，畑1町5反5畝09歩，合計1町8反5畝27歩を耕作できない土地，すなわち山林へ地目変換する手続きをおこなった。ただし，土地登記簿上は，農地改革の基準日とされた1945年11月23

日時点では地目変換がなされていない（地目変換の登記は、1953年5月28日）。農地改革の際に、実質的に耕作できない土地1町8反5畝27歩が存在することが考慮されて、所有の上限を上回る耕地の所有が認められたようである。そのため、農地改革後に六郎家には、上記の農地の他に、原野3反4畝24歩、山林3町2反8畝14歩、墳墓地1畝09歩、宅地1,409坪06が残った。坪に換算すると総計約2万3,500坪である。

農地改革終了後の1953年、須崎六郎は所有する土地を、生前にすべて家族に寄贈した。寄贈した相手は、はな、三四（読みは「みよし」）、勝茂、重治の4人である。まず、5月29日にはな、勝茂と重治に寄贈し、ついで6月12日に三四とはな（宅地分）に寄贈している。寄贈の順序と、六郎居宅の宅地がすべてはなに寄贈されたことからみて、はなは六郎の実の娘であり、はなと結婚して三四は須崎姓となったようである。勝茂は三四とはなの息子（六郎の孫）である。おそらく重治は六郎の弟でないかと思われる。

田畑のすべては三四へ寄贈された。三四が農業者として主に耕作をおこなっていたためであろう。はなへは山林と宅地、勝茂へは原野と山林、重治へは山林が寄贈された。面積でみると、はなの分がもっとも広い。しかし、公的に定められた「賃貸価格」（税金を徴収するために定められたもの）でみると、田畑を寄贈された三四が397円30銭でもっとも多く、ついではなであり、勝茂、重治の値はかなりすくない。したがって、金額ベースでみると、三四・はな夫婦へ六郎の土地のほとんどが寄贈され、一部が勝茂と重治に寄贈されたのである。

2. 丸沼倉庫

農業に従事していたと思われる三四は、1969年6月2日に株式会社丸沼倉庫を設立して⁽²⁹⁾、倉庫業に参入した。本店所在地は自宅と同じ上内間木789番地、資本金は200万円（総株数4,000株、1株500円）である。1980年4月期（1979年5月～1980年4月）の売上高は1億1,800万円である⁽³⁰⁾。1980年頃の同社の得意先として、旭硝子、

東京板硝子センター、エービーシー商会在『帝国銀行会社年鑑』に記載されていることから、現在と同じく、丸沼倉庫は、本来の倉庫業（自ら荷物を預かり、保管する業務）ではなく、貸倉庫業（所有する倉庫を他社へ貸し出す業務）を営んでいたようである。

1973年版のゼンリン『住宅地図 朝霞市』をみると、武蔵野線の北側に隣接して「(株)丸沼倉庫」という敷地が表示されている（場所は現在の第1倉庫、第3倉庫、第4倉庫の敷地の一部）。この敷地は三四とはなが所有する土地である。その後、1980年11月9日に、現在の第1倉庫（武蔵野線の北側。2階建て、床面積2万8,400m²。1階部分は1万4,400m²）が竣工した（第2-2表）。勝茂によると、三四が経営していたときの倉庫敷地が3,600坪（約1万1,900平方メートル）ということなので、1981年1月30日に三四が死亡した時点で存在するのは現在の第1倉庫と呼ばれている建物だけのようである。

1977年3月30日に重治が死亡すると、六郎から重治へ寄贈された土地はすべて勝茂が相続した。ついで1981年に三四が死亡すると、三四所有の土地はすべて息子の勝茂が相続した。重治・三四の土地を相続した勝茂は、父から受け継いで丸沼倉庫の事業を急速に拡大する。1984年に刊行されたゼンリン『住宅地図 朝霞市』1985年版では、現第1倉庫のほかに、武蔵野線の南側に隣接する土地（現在、第5倉庫が立地している土地）に4棟の倉庫を確認できる。勝茂が経営する時代になって、まずこの4棟が建設され、ついで武蔵野線の北側で荒川の堤防に近い部分に第2倉庫が1990年10月31日に竣工し、さらに武蔵野線の北側に隣接する敷地に現第3倉庫（2004年10月1日竣工）、現第4倉庫（2006年4月13日竣工）が設置された。さらに、武蔵野線の南側の倉庫4棟は取り壊され、2007年10月19日に大規模な倉庫1棟（第5倉庫）が竣工し、これにより現在の業容になる（第2-2表）。5つの倉庫の床面積は6万1,296m²（2万9,258坪）である（敷地については後述）。倉庫の貸出先は、三井物産の子会社の物産ロジスティクスソリューションズと三

第2-2表 現在の丸沼倉庫の建物 (床面積の単位：m²)

	新築年月日	構造	床面積	坪換算
第1倉庫	1980年11月9日	2階建て	28,400.00	8,600.8
第2倉庫	1990年10月31日	6階建て	19,183.68	5,809.7
第3倉庫	2004年10月1日	2階建て	8,549.56	2,589.2
第4倉庫	2006年4月13日	4階建て	7,582.51	2,296.3
第5倉庫	2007年10月19日	6階建て	32,895.98	9,962.4

(出所) 丸沼倉庫の「全部事項証明書」家屋番号459-1, 460-1, 483-1, 684, 748-1。

第2-3表 丸沼倉庫の貸借対照表 (2012年4月30日現在) (単位：千円)

資産の部		負債・純資産の部	
流動資産	781,494	流動負債	1,263,464
うち現金及び預金	660,460	固定負債	8,556,032
固定資産	11,437,272	うち長期借入金	6,782,737
うち建物及び付属設備	5,578,688	負債合計	9,819,497
うち工具・器具・備品	948,785	純資産	2,399,269
うち土地	4,176,435	うち資本金	10,000
		うち利益剰余金	2,392,269
資産合計	12,218,767	負債・純資産合計	12,218,767

(出所) 「東京商工リサーチ財務情報」の丸沼倉庫2012年4月期決算。

井食品、1980年代前半にはすでに契約を確認できるエービーシー商会（建材の販売）などである⁽³¹⁾。2012年4月期の売上高は15億5,083万円、当期利益3億0,414万円であり、売上高は1980年4月期1億1,800万円の13倍の規模に達している。

このような業容の拡大に比較して、丸沼倉庫の資本金は1983年4月21日に500万円、1995年6月25日に1,000万円に増加しただけで、現在も1,000万円のままである。2012年4月30日現在でみると（第2-3表）、わずか1,000万円の資本金の会社が122億1,877万円もの資産を抱えている。資産の大半を占めるのが倉庫の建物（付属設備を含む）56億円と土地42億円、合計98億円である、この資産のために調達している資金のうち主なものは長期借入金68億円と利益剰余金24億円、合計92億円である、利益剰余金のほとんどは過去に生み出した利益を処分しないままに内部に留保したものであり、それが24億円もの巨額に達している。このように丸沼倉庫は、銀行な

どの金融機関からの借入金と内部に留保した資金によって、巨額の建物と土地を所有しているのである。

2012年4月期の同社の従業員数はわずか5人、5人に対する給料手当の総額は146万円に過ぎない。したがって、同社は単に貸倉庫業を営むだけで、それ以外にほとんど業務をおこなわない会社と思われる。にもかかわらず、同社は「大手企業との長期契約」によって「安定した倉庫料収入を確保」しているのである⁽³²⁾。

3. 丸沼芸術の森コレクションの資金源泉

では、須崎勝茂がコレクションを形成し、丸沼芸術の森においてアーティストを支えつづけることができる資金源泉はどこにあるのか。

須崎勝茂が経営に関与して企業は、丸沼倉庫の他に、株式会社丸沼商事（所在地は丸沼倉庫と同じ。勝茂は代表取締役、業種は建築工事、資本金4,600万円）、須崎興業株式会社（所在地は上内間木728、業種は貸事務所、勝茂は代表取締役）、

株式会社三四（所在地は栃木県小山市駅東通り、業種は板ガラス加工、勝茂は会長、資本金1,000万円）である⁽³³⁾。このうち売上高、当期利益が飛び抜けて大きいのが丸沼倉庫である。そのため、まず丸沼倉庫に即して配当、役員報酬、土地の3つを検討しよう。

現在の丸沼倉庫の発行済み株式の総数は1万株であり、東京商工リサーチも帝国データバンクも勝茂5,000株、丸沼商事3,000株、俊彦2,000株と表示している⁽³⁴⁾。しかし、2011年4月30日現在および2012年4月30日現在、共に純資産の部の自己株式がマイナス300万円になっている。おそらくこれは丸沼商事が所有していた3,000株を300万円で取得したものであろう。そうすると、株式1万株の所有者の内訳は、勝茂5,000株、俊彦2,000株、自社（丸沼倉庫）3,000株となる。ちなみに2008年4月30日現在では丸沼倉庫は自社株を所有していない⁽³⁵⁾。

なお、丸沼商事は1982年11月17日に勝茂が設立し、現在、代表取締役を勤めている企業である。同社の営業種目は建築工事である、2012年2月現在の資本金は4,600万円、推定発行総株数230株のうち勝茂が167株、丸沼倉庫が57株を所有している。2012年2月期の当期利益は553万円であり⁽³⁶⁾、丸沼倉庫の2012年4月利益3億0,414万円と比較すると、利益額はかなり少ない。

少し前に遡って丸沼倉庫の株主構成をみると、2000年4月頃では持株比率が丸沼商事34%、勝茂32%、俊彦18%、その他16%となっており、勝茂の持株比率は3分の1である⁽³⁷⁾。

丸沼倉庫の配当をみると、1998年4月期～2000年4月期は10%の配当であり、したがってこの3期の配当額を合わせても300万円にすぎず、勝茂へは100万円程度が支払われたにすぎない。最近では、2007年4月期決算で300万円の配当をおこなったようであり、勝茂に150万円が支払われたことになる。2011年4月期決算は無配のようである⁽³⁸⁾。1998年4月期決算以降、丸沼倉庫は、当期利益のほとんどを内部留保に回したと思われる。したがって、これまでに勝茂が受けとった配当はコレクション等の原資とは考えられない。

つぎに役員報酬をみよう。2012年4月現在の役員は須崎勝茂、須崎俊彦、梶取信、清水秀男、竹井孝之の5名であり、うち勝茂が社長、俊彦が専務取締役を務めていた⁽³⁹⁾。2012年の役員報酬は1億0,425万円である。かりに勝茂が半分を受け取ったとすると5,000万円くらいになる。判明する2007年4月期の役員報酬は1億3,224万円、2008年4月期の役員報酬は1億0,293万円であるので⁽⁴⁰⁾、半分と仮定すると2007年4月期以降、每期、5,000万円から6,000万円の役員報酬を受け取ったことになる。したがって、勝茂がえた役員報酬はコレクション形成の原資（資金源泉）の一部となりうる額である。

さらに丸沼倉庫が所有する土地をみよう。丸沼倉庫は2012年4月30日現在、41億7,644万円の土地を所有している。この数値はこれまで購入した土地の取得原価を積み上げたものと考えられる。いいかえれば、41億7,644万円に上る土地の購入代金をだれかに支払っていることになる。だれに支払ったかをみるために、購入時期を整理した第2-4表を検討しよう。この表は、ゼンリン『住宅地図 朝霞市』と公図を照合して、①第1倉庫～第5倉庫の敷地、②須崎勝茂の自宅敷地、自宅敷地北側に隣接する駐車場、および自宅東側道路の反対側に位置する駐車場、③丸沼芸術の森の敷地およびこれに隣接する土地（70筆）、④その他、須崎家が六郎の代から所有していた土地、以上合計75筆のうち、現在丸沼倉庫が所有する70筆について所有者の変遷を整理したものである（倉庫などの所在地は第2-1図）。ただし、調査した①～④以外に近年になって丸沼倉庫は土地を購入している。しかし場所を特定できないため、これを含まない。また、第2倉庫、第3倉庫、第4倉庫の敷地のなかには勝茂の家族以外から借り入れている土地が9,895m²（約3,000坪。12筆）ある。

会社設立の1969年から1981年1月30日の三四死亡以前では、丸沼倉庫は三四やはななどから土地を借りて建物（倉庫）を建設し、倉庫業を営んでいた。丸沼倉庫が初めて土地を購入したのは、1985年4月5日である。この土地（1,504m²。坪換算455坪、現在の第4倉庫の敷地の一部）の購

第2-4表 丸沼倉庫の土地購入

(面積の単位：m²)

購入年	1985-1988	1991-1994	2004	2005-2006	2010	合計
購入先面積	須崎はな 10,512.94	須崎はな 1,000.00				11,512.94
購入先面積		須崎勝茂 5,087.60	須崎勝茂 13,034.59	須崎勝茂 850.91	須崎勝茂 39,517.67	58,480.77
購入先面積	家族以外 1,504.00			家族以外 3,013.11	家族以外 1,662.74	6,179.85
合計面積	12,016.94	6,087.60	13,034.59	3,864.02	41,180.41	76,183.56

- (注) 1. 1991-1992年の須崎はなからの購入は、土地面積3,489.79坪の土地の34万8379分の10万の共有持分を購入したのである。2000年の須崎勝茂からの購入には、土地面積3,489.79坪の土地の34万8379分の24万3879の共有持分が含まれている。いずれも持分比率で計算した面積を掲出した。
2. 丸沼倉庫が購入した時点での面積である。このため現在の丸沼倉庫の所有面積の数値とすこし異なる。

第2-1図 丸沼倉庫、丸沼芸術の森、自宅などの所在地



入先は守屋武雄である。この土地は、かつて農地改革によって六郎から農林省が強制買収した土地である。したがって須崎家側（丸沼倉庫）が買い戻したことになる。ついで同年10月16日にはな所有の土地1筆（地番は上内間木461-1、2,780m²。坪換算842坪）、さらに1986年から1988年

にかけてはな所有の土地7筆を丸沼倉庫が購入した。この8筆の合計1万0,513m²（坪換算3,184坪）はすべて現在の第1倉庫の敷地の一部である。これらの購入資金は、金融機関からの借入金で賄われたと思われる。つまり勝茂が社長として丸沼倉庫の倉庫業を拡大した1980年代の後半に、積

極的に倉庫敷地を自社で所有するよう経営方針を転換したのである。

1991年10月31日と1992年7月31日には勝茂が重治から相続した現第3倉庫の土地の一部を丸沼倉庫が勝茂から購入し、1994年8月31日には現第2倉庫の土地の一部3,489坪79の共有持ち分(34万8,379分の10万, 1,000坪相当)をはなから購入した。

2000年12月25日はな死亡に伴い、はな所有の土地はすべて勝茂が相続した。したがって勝茂は、三四、はな、重治が残した土地をすべて相続することになった。勝茂は2004年4月27日に丸沼倉庫へ合計1万3,035 m^2 の土地を売却した。これはすべてはなから相続した土地である。とくに2004年4月27日の売却で注目されるのは、勝茂の自宅敷地の主要部分(3,562 m^2 , 坪換算1,078坪)が丸沼倉庫の所有に移り、これにより自宅敷地はすべて丸沼倉庫所有となったことである。

2010年9月30日には勝茂から3万9,517 m^2 もの土地を丸沼倉庫が購入した。このなかで注目されるのは、飛び地を含む丸沼芸術の森の敷地9,436 m^2 (2,858坪)と福祉施設へ提供している隣接の土地が含まれていることである。この土地の所有権移動より以前は、勝茂個人が所有する土地をアーティストや福祉施設に無償で貸していたと思われる。ところが土地の所有権の移動を契機として、勝茂個人によるアーティスト支援が、アーティストに丸沼倉庫が活動の場を提供するという、いわゆる企業メセナへ変化しつつあるようである。

2010年の勝茂からの土地所有権の移動によって、かつて六郎が所有していた土地で家族に相続された土地のうち、丸沼倉庫所有でない部分は勝茂所有の4筆576.59 m^2 (約174坪)と重左衛門名義のままの墳墓地の1筆1畝09歩(39坪)だけとなり、勝茂の自宅敷地を含むほとんどすべての土地が丸沼倉庫の所有となった。したがって、丸沼倉庫は須崎家の資産管理会社的性格を色濃く備えるようになったといえよう。

つぎに1985年から2010年までの合計でみると、購入総面積7万6,184 m^2 (坪換算2万3,110坪)

のうち、はな・勝茂以外から購入したのは全体の8%に過ぎず、92%ははな(15%)と勝茂(77%)から購入している。2011年4月30日現在の丸沼倉庫貸借対照表の土地の簿価が41億2,351万円なので、土地の価格変動は無視し、上記の①から④以外で近年購入した土地の存在も無視して、極めておおざっぱに計算すると、勝茂へ31億6,532万円、はなへ6億2,309万円が流れたことになる。2000年のはな死亡にともなう巨額の相続税支払を差し引いたとしても、勝茂の手元には巨額の資金が残ったはずである。したがって、勝茂が個人の資金ですべて美術品を購入したと仮定すると、勝茂が形成したコレクションの最大の原資(資金源泉)は土地売却代金(土地)である。

これまでの分析をまとめてみると、須崎六郎の土地が、はな、三四、勝茂、重治の4人に寄贈された後、三四・はな・重治の遺産を勝茂1人が相続した。しかもはな・勝茂は丸沼倉庫という会社を通じて相続した土地を現金化している。したがって現在から遡って考えると、勝茂が相続した土地がコレクションの最大の資金源泉といえよう。

ただし、ここまでは勝茂が個人の資金でコレクションをすべて収集したと仮定した場合の話である。実際には、つぎのように丸沼倉庫の資金でかなりの美術品を購入している。

1998年12月10日施行の「美術品の美術館における公開の促進に関する法律」により、美術品登録制度が始まった。この法に基づき、2000年12月7日に文化庁長官によって「登録美術品」に登録されたクロード・モネ「ルエルの眺め」(登録番号9)、ウジェーヌ・ドラクロワ「聖ステパノの遺骸を抱え起こす弟子たち」(登録番号10)の所有者は丸沼倉庫である⁽⁴¹⁾。このうち、前者は1994年にブリジストン美術館で開催された「モネ展」で展示され(モネのカタログ・レゾネの1番目に掲載されているものでもある)、展覧会開催後に日本の画商から購入された。また、この2点と同時に登録申請されたものの、有識者からの意見聴取手続きの際に贋作ではないかという意見がたため、勝茂が気分を害して申請を取り下げたカミーユ・コロー「ヴィル・ダヴレーの湖

畔の朝霧」も丸沼倉庫の所有のはずである⁽⁴²⁾。

小品であっても1点数千万円が珍しくないモノ、ドラクロワ、コロアの油彩画を個人が購入する際には、かなりの資産家であっても躊躇するであろう。その点、企業の経営者であれば、自分が経営する企業の勘定で購入するほうが比較的ではあるが心理的に容易なようである。とくにオーナー経営者の場合には、事実上、自らの判断で購入できる。

戦後の著名な美術品コレクターと同様に、おそらく丸沼芸術の森コレクションも、企業の資金でかなりの部分で購入され、現在も購入され続けていると思われる。そのように推定できるのは、丸沼倉庫の貸借対照表（前掲、第2-3表）でつぎの数値を確認できるからである。丸沼倉庫は、本来の倉庫業を営まないにもかかわらず、2012年4月30日現在、9億4,879万円もの工具・器具・備品を所有している。2007年4月30日現在（7億5,796万円）⁽⁴³⁾に比べると、5年間に約2億円も増加している。もし会社の業務に関わる工具・器具・備品であれば減価償却の対象となり、償却期間も短いものが多いため、一方で買入れても、他方で減価償却するため、このように残高が急増するとは考えにくい。残高が急増して9億5,000万円近くに達しているのは「工具・器具・備品」の中に減価償却の対象とならないもの、すなわち美術品がかなり含まれているためと考えられる。美術品購入に振り向けることのできる現金・預金残高も6億6,046万円あり、潤沢である。

総じて丸沼芸術の森コレクションは、戦後の日本で形成される大規模な美術品コレクションの典型的な特徴（個人の資金だけでなく、企業の資金でも購入⁽⁴⁴⁾）をもっている。このコレクションに代表される丸沼芸術の森の活動は、企業が主として資金を提供して文化・芸術活動を支援する企業メセナとしての性格を色濃くもつものといえよう。

《注》

- (1) 赤瀬川原平『個人美術館の愉しみ』（光文社、2011年）125ページ。
- (2) 完成品でも売れないものは河鍋家に残ることに

なる。明治維新後、幕府・大名に支えられていた能役者・狂言役者は能に対する需要がほとんどなくなったために窮乏した。そのため能・狂言を題材とした絵も売れず、そのため晁斎が能・狂言を描いた完成作品が多く河鍋家に残されることになった。現在国内を巡回している「河鍋晁斎の能・狂言画」展は、ほとんどが河鍋晁斎美術館の所蔵品である。巡回展は4月～6月東京の三井記念美術館、7月～9月石川の金沢能楽美術館で開催している。

- (3) インターネットのサイトで、勝茂ではなく、母のはな所有の土地を提供したとしているものがある。勝茂が丸沼芸術の森は「須崎はなによって創立された」と記しているために（須崎勝茂「ごあいさつ」、丸沼芸術の森・朝霞市博物館『ニッポンノクレイ——丸沼芸術の森コレクションと朝霞の工芸作家たち——』朝霞市博物館、2004年）、土地の所有者を誤認したのかもしれない。
- (4) ゼンリン『住宅地図 朝霞市』1987年版（1987年2月）。
- (5) 現在、100坪の教室に10基の電動ロクロ、大型電気炉、還元焼成可能な灯油窯、薪穴窯の設備を備えた陶芸教室である。「丸沼陶芸倶楽部」（<http://www.marunuma-tougei.com/>、2013年6月2日最終確認）。
- (6) 講演会「佐藤忠良との出会い、そして、つながれた絆」2012年11月1日開催（朝霞市博物館）で配布のチラシ。
- (7) 須崎勝茂「ごあいさつ」（丸沼芸術の森・朝霞市博物館編『佐藤忠良展——彫刻家佐藤忠良と共に歩んだ作家たち——』朝霞市博物館、2012年）。
- (8) 小山登美夫『現代アートビジネス』（アスキー・メディアワークス2008年）60ページ。
- (9) 「東京芸術大学美術博士 学位論文」（<http://www.lib.geidai.ac.jp/APHD/APHD.html>、2013年11月8日最終確認）。
- (10) 『ネオテニー・ジャパン——高橋コレクション——』（美術出版社、2008年）18、129ページ。
- (11) 岡部あおみによる須崎勝茂へのインタビュー記録、2005年6月4日実施（<http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/collectorartcriticjournalist/marunuma/intevie/>、2013年5月16日最終確認）。
- (12) ただし、ロックフェラー財団のACCグラントに合格して1994-1995年にニューヨークに滞在していた。
- (13) 『美術手帖』（2010年11月号）村上隆特集に所収の村上隆年表。

- (14) 有限会社カイカイキキの「閉鎖事項全部証明書」。
- (15) ゼンリン『住宅地図 朝霞市』(2006年8月), 同2007年版(2007年5月)。丸沼芸術の森の敷地の東南にある、アトリエでは最も広い建物に「有限会社カイカイキキ」、北西の端の建物に「村上隆」、北東の建物に「村上隆」と表示されている。
- (16) 有限会社カイカイキキの「履歴事項全部証明書」。
- (17) 前掲『美術手帖』36ページでは、「広大な敷地面積に全3棟の倉庫が並び、うち1棟が主に絵画を制作するアトリエとして割り当てられている」と三芳スタジオを説明している。登記簿によると、敷地面積は5,056 m² (1,531坪)であり、建物はこの説明とは異なり、事務所1棟(2階建て, 1階64 m², 2階65 m²)が付属する倉庫1棟(2階建て, 1階床面積1,478 m², 2階床面積1,717 m²), 同じく事務所1棟(2階建て, 1階57 m², 2階58 m²)が付属する倉庫1棟(2階建て, 1階床面積1,092 m², 2階床面積1,108 m²)で、つまり倉庫は2棟で、1階部分の倉庫床面積合計は778坪もの広さである。建物については有限会社みずほ興産、小沢悦子・小沢喜正の「全部事項証明書」、土地については池上治雄、小沢喜正の「全部事項証明書」による。
- (18) 1996年11月という記載は、中村音代「丸沼芸術の森とワイエスの周辺」(『丸沼芸術の森所蔵アンドリュー・ワイエス水彩素描展』丸沼芸術の森, 2004年)112ページ。なお、この展覧会に寄せたワイエスの手紙には1997年に勝茂に会ったとされている(7ページ)。おそらくワイエスの記憶違いと思われる。
- 前掲、岡部あおみによる須崎勝茂へのインタビュー記録で、須崎は購入の経緯を語っている。1994年に238品が来たけれど高くは買えなかった。3年後にまた来たので買ったと述べている。もしそうであるとすると、1997年に購入したことになる。
- 講演会「佐藤忠良との出会い、そして、つながれた絆」2012年11月1日開催(朝霞市博物館)で勝茂は10月4日から5日にワイエスにあったと述べている。ところが、上記の中村音代の記述(114ページ)では10月下旬としている。
- ワイエス購入の経緯については、関係者の発言が錯綜しているので、今後、再検討が必要である。
- (19) 中村音代「ワイエスの世界に導かれて」(『アンドリュー・ワイエス — 創造への道程 —』愛知県美術館・中日新聞社, 2008年)181ページ。
- (20) 『ベン・シャーン展』(埼玉県立近代美術館・丸沼芸術の森, 2006年), 『丸沼芸術の森 ベン・シャーン展 緑の魔術師』(丸沼芸術の森, 2012年), 『丸沼芸術の森コレクション 佐藤忠良展 — 彫刻家佐藤忠良と共に歩んだ作家たち —』(丸沼芸術の森・朝霞市博物館, 2012年), 丸沼芸術の森「今後のイベント」(<http://marunuma-artpark.co.jp/event/index.html>, 2013年11月9日最終確認)。
- (21) 前掲、岡部あおみによる須崎勝茂へのインタビュー記録。
- (22) 岡部あおみによる小柳敦子へのインタビュー記録, 2004年5月6日実施 (http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/gallery/gallery_koyanagi/interview.html, 2013年6月2日最終確認)。
- (23) 小柳が示した価格は、ギャラリー(美術商)が作家と契約して作品を預かって、売る1次市場(プライマリーマーケット)での価格である。これに対して、作家が直接販売した後に、あるいは契約ギャラリーを通して販売した後に取引される、オークションなどの2次市場(セカンダリーマーケット)では、杉本作品はプライマリーマーケット市場の価格よりも遙かに高い値段で取引されることがある。オークションでみると、劇場シリーズのなかでは、2010年に“Ohio theater, Ohio”が36万2,500米ドル(約3,200万円)で落札されているのが最も高い。「杉本博司 Hiroshi Sugimoto アーティストマーケットバリュー」(<http://artistmarketvalue.blogspot.jp/2013/04/hiroshi-sugimoto.html> #!/2013/04/hiroshi-sugimoto.html, 2013年6月21日最終確認)。
- (24) 前掲、須崎勝茂「ごあいさつ」。
- (25) ゼンリン『住宅地図 朝霞市』2012年版(2012年5月), 丸沼陶芸倶楽部ホームページ (<http://www.marunuma-tougei.com/>, 2013年11月9日最終確認)。
- (26) 上内間木の外にどれだけ土地を所有していたかは不詳である。上内間木に所有する土地は、自宅に近接する部分がほとんどであるので、上内間木の外に持っていたとしても、わずかであると思われる。
- (27) 須崎六郎家の土地の所有権が農林省に移転登記された日は1949年9月21日, 10月6日, 1950年1月20日であり、その後、買い受け希望の農民に土地が譲渡された。
- (28) 『朝霞市史』通史編(1989年)1147-1148ページ。
- (29) 丸沼倉庫の「履歴事項全部証明書」, 「閉鎖登記簿」。

- (30) 帝国データバンク『帝国銀行会社年鑑』のなかで、初めて丸沼倉庫が記載された1982年版(1981年刊)2927ページによる。
- (31) 東京商工リサーチ『東商信用録』2011年版(2011年)1231ページ、ゼンリン『住宅地図 朝霞市』(2010年)。
- (32) 「東京商工リサーチ企業情報」の丸沼倉庫(データの更新日は2012年9月21日)、「東京商工リサーチ財務情報」の丸沼倉庫。
- (33) 「東京商工リサーチ企業情報」の丸沼商事(データの更新日は2012年5月29日)と須崎興業(データの更新日は2012年8月9日)、「帝国データバンク企業情報」の株式会社三四、「会社案内 株式会社三四」(<http://www.miyoshi9672.jp/company/summary.html>, 2012年5月28日最終確認)。
株式会社三四は、須崎三四が1978年3月に設立した企業のようなのである。2012年7月期決算の売上高は2億5,000万円である。
- (34) 前掲、東京商工リサーチ『東商信用録(関東版)』2011年版(2011年)1231ページ、帝国データバンク『帝国データバンク会社年鑑』2013年版(2012年)3706ページ。
- (35) 「帝国データバンク財務情報」の丸沼倉庫2007年4月期決算, 2008年4月期決算。
- (36) 「東京商工リサーチ企業情報」の丸沼商事, 丸沼商事の「履歴事項全部証明書」。
- (37) 東京商工リサーチ『東商信用録(関東版)』2000年版(2000年)1131ページ。
- (38) 前掲、東京商工リサーチ『東商信用録(関東版)』2000年版, 1131ページ、東京商工リサーチ『東商信用録(関東版)』2010年版(2010年)1214ページ、東京商工リサーチ『東商信用録(関東版)』2011年版(2011年)1231ページ。
- (39) 丸沼倉庫の「履歴事項全部証明書」, 前掲、帝国データバンク『帝国データバンク会社年鑑』2013年版, 3706ページ。
- (40) 前掲「帝国データバンク財務情報」の丸沼倉庫2007年4月期決算, 2008年4月期決算, 「東京商工リサーチ財務情報」の2012年4月期決算。
- (41) 文化庁「登録美術品概要」(<http://www.bunka.go.jp/1bijyutu/main.asp%7B0fl=show&id=1000001626&clc=100000017&cmc=1000001584&cli=1000001588&cmi=1000001622%7B9.html>, 2013年5月30日最終確認)。
- (42) 須崎勝茂は「佐藤忠良との出会い, そして, つながれた絆」2012年11月10日講演(朝霞市博物館)で, モネ「ルエルの眺め」購入の経緯を紹介するとともに, コロー「ヴィル・ダヴレーの湖畔の朝霧」について, 次のように説明している。この作品は, サザビーズのオークションで落札したものである。贋作という意見に反論するためサザビーズから真作である旨の証明書を取り付けて文化庁に提出し, それにより贋作の疑いは晴れたものの, 登録申請を取り下げたという。
- (43) 「帝国データバンク財務情報」の丸沼倉庫2007年4月期決算。
- (44) 戦前の美術品の大コレクターは, 自らの資産・収入によって美術品を購入することができた。戦後の資本家・経営者に比べ, 戦前の資本家・経営者の所得が一般の従業員の所得に比べてはるかに高く, 自らの資金で大量に美術品を収集できたからである。戦後になると, オーナー経営者の出光佐三(出光コレクション, 現在, 出光美術館に所蔵)も出光興産の資金で購入しているし, 2代目創業者の安宅英一(安宅コレクション, 現在, 大阪市東洋陶磁美術館に所蔵)は株式会社安宅産業の取締役会に美術品の購入計画案を提出して, 購入している。またサントリーの佐治敬三は, 企業(壽屋)の社会貢献として美術品の収集をはじめた(現在, サントリー美術館所蔵)。収集品のうち国宝・重要文化財の指定物件をみると, 長らく所有者は寿不動産(サントリー創業者一族の資産管理会社)となっていた。東京急行電鉄の経営者五島慶太のコレクション(現在, 五島美術館所蔵)のうち中核的な部分(源氏物語絵巻など, 高梨仁三郎から3億円で購入したもの)は自分の資金ではなく, 東京急行電鉄の資金で購入したものであり, 現在も同社の所有である。